広報 霞ヶ浦

'93 10月号
No. 399

霞ヶ浦ふれあいランドの入館者が３０万人を達成

「霞ヶ浦ふれあいランド」の入館者が、10月３日に30万人に達しました。

30万人達成を記念して「水の科学館」玄関前でセレモニーが行われました。

30万人目の入館者は、土浦小学校６年の辰己雄介君で、両親の馨さん、仁美さんと妹の佳代さん（３年生）の４人で訪れたもので今回が２度目の入館。

また、10月３日にちなんで30万３人目の入館者は土浦市の会社員井上光二さんと奥さんの英子さん。それぞれ記念品が贈られました。

特集

熱気あふれた『霞ケ浦シンポジウム』

環境問題や資源の新たな活用を探って……

テーマ：
"町づくり資源としての霞ケ浦"

玉造町と常陽新聞社主催による『霞ケ浦シンポジウムin玉造』が、九月十八日に玉造町中央公民館で開かれました。シンポジウムは、常陽新聞創刊四十五周年記念事業の一環も兼ねて行われたもので、約二百人の皆さんの参加がありました。「町づくり資源としての霞ケ浦」をテーマに、霞ケ浦との係わりをいろいろな面から探りました。パネラー（意見発表者）には、地元玉造町でそれぞれの立場で活動している七人、西谷正明さん、大崎靖子さん、野原幸之助さん、羽生誠さん、野原淳一郎さん、代々木正文さん、荒井一美さんが選ばれ、発表を行いました。特別参加として玉造中学校一年生の大塲保昭君と武田美津恵さんが霞ケ浦の浄化を訴えました。

シンポジウムは、小沼昭男玉造町助役の開会で始まり、主催者側として坂本常藏玉造町長と野沢忍常陽新聞社会長がそれぞれあいさつ。

来賓として横田茂行水資源開発公団霞ケ浦開発事業建設部長は「昭和四十六年からことして二十三年間仕事をしているが、来年度をもって終了する。町と県と水の科学館を建設させていただいたが、これは水と霞ケ浦の情報発進源としてますます重要になってくると思う。本日のパネラーの皆さんの意見を拝聴し、生かせるものがあれば、そうしていきたいと考えています…」と述べました。

続いて笹目孟玉造町議会議長は「霞ケ浦と係わりの深いわが玉造町で、このようなシンポジウムが開催できることは、関係各位のご理解とご協力によるものと、深く敬意を表します。大いに期待いたします…」。

パネラーの皆さんの発表に先だち、特別参加として玉造中学校一年生の大塲保昭君と武田美津恵さんが、中学生の立場から霞ケ浦の再生と水質浄化を訴えました。

途中、アトラクションとして茎崎町出身のシャンソン歌手海老原順さんの歌三曲が披露されました。海老原さんはふるさと霞ケ浦を少しでもきれいにしたいという願いを込めた曲「レッツ・クリーンアップ・ザ・レイク」をうたい、浄化を呼びかけました。

シンポジウムでは、さまざまな意見なり提言があがり予定時間をかなりオーバーするなどの盛りあがりました。最後にコーディネーターの水上聡子さんが述べましたが、「ぜひ、これをきっかけに第二段、第三段と続け、テーマをもっと個別に深く掘り下げてほしい」との言葉のように、次へのシンポジウムの新たなステップになりました。

パネラーの意見発表題名

- ▷西谷　正明 …「玉造町と霞ケ浦」
- ▷大崎　靖子 …「水辺の調査活動から」
- ▷野原幸之助 …「湖岸の自然の現状と課題」
- ▷羽生　誠 …「霞ケ浦漁業の現状と課題」
- ▷野原淳一郎 …「霞ケ浦と養殖漁業」
- ▷代々木正文 …「霞ケ浦資源の再活用と商工会青年部の取り組み」
- ▷荒井　一美 …「これからの霞ケ浦を考える」

【特別参加】

- ▷大塲　保昭（玉造中１年） …「玉造町と霞ケ浦」
- ▷武田美津恵（玉造中１年） …「霞ケ浦の水質浄化に思う」

ことば

シンポジウム……
ある一定のテーマについて、あらかじめ選ばれた何人かの者が意見を述べ、それに対して参加者全員がそれぞれ意見を出し合いながら討論を行うもので、必ずしも結論を出すことを目的としない。

パネラー……
代表者として意見を述べる人のこと。

コーディネーター……
講演やシンポジウムでの司会者のこと。

▶主催者あいさつをする坂本常蔵町長

▶主催者あいさつする野沢忍常陽新聞社会長

▶開会のことばを述べる小沼昭男町助役

▶来賓あいさつをする横田茂行水資源開発公団部長

▶来賓あいさつをする笹目孟町議会議長

▶閉会のことばを述べる島田隆四郎町教育長

新たな「町づくり」へのステップに

わが町玉造は高浜入をのぞむ霞ヶ浦湖畔にあって、古来から霞ヶ浦とは共存共栄の生活を営んでまいりました。かつては、ワカサギ・シラウオ漁が盛んに行われ、湖岸のいたるところで水遊びが楽しめたほどでした。紫峰筑波を眺める風景は霞ヶ浦第一の風光明媚さをほこり、夕陽のチャンスをねらい訪れる人があとを絶ちません。

近年、霞ヶ浦の水質汚濁が進み、浄化が叫ばれており、町としましても積極的に取り組んでおりますが、ことが霞ヶ浦流入河川全域に及ぶことから早急な解決策は難かしいようです。

昭和62年３月の「霞ヶ浦大橋」の開通は従来の交通体系を大きく変え、そのたもとに昨年４月オープンした「霞ヶ浦ふれあいランド」は、観光施設の拠点として、今後の玉造町の発展に大きな活性化をもたらすものと考えております。こうした折、霞ヶ浦とわが玉造町の係わりを、新たな「まちづくり」の観点から探ぐる『ルネッサンス霞ヶ浦シンポジウムin玉造』を、関係者各位のご理解とご協力により開催出来ますことは、誠に喜こばしい限りであります。

パネラーの皆さんは、それぞれ霞ヶ浦の再生と町の発展に貢献されている方ばかりでありますから、シンポジウムが多くの町民のご参加により実りあるものとなりますよう、大いに期待している所でございます。

最後に、各パネラー、コーディネーター、ご協力いただいた関係各団体の皆さんに感謝申し上げますとともに、創刊45周年を記念して霞ヶ浦の浄化・再生をテーマに活動を展開されている常陽新聞社の情熱に深く敬意を表しまして、ごあいさつといたします。

玉造町長　坂　本　常　藏

プロフィール

（敬称略）

★コーディネーター

水上聡子（地域計画連合副主任研究員）

一九六四年金沢生まれ。つくば市谷田部在住。地域計画、都市計画のコンサルタント業務に携わるかたわら、環境問題、市民主体のまちづくりをテーマに、地域活動に自らも取り組んでいる。

★パネラー

西谷正明（玉造町役場企画商工課企画商工係長）

長年企画マンとして町の振興計画に係わり、まちづくりに恵念。昨年オープンした「霞ヶ浦ふれあいランド」の建設に参画。

大崎靖子（玉造町くらしの会会長）

五年前から霞ヶ浦湖岸と梶無川の水質調査を実施し、水辺の環境問題に関心をよせる。特に水生植物帯の保全を訴え活動を続けている。

野原幸之助（玉造町ふるさとの自然に親しむ会会長）

ふるさとの自然観察会などにより自然の姿（実態）の把握に努める。元小・中学校長。「霞ヶ浦環境情報サービスセンター（水の科学館一階）の嘱託。

羽生　誠（玉造漁業協同組合組合長）

霞ヶ浦の再生と漁業に情熱をそそぎ、わかさぎの人工ふ化にも取り組む。茨城県霞ヶ浦北浦海区漁業調整委員もつとめる。

野原淳一郎（霞ヶ浦北浦小割式養殖漁業協同組合組合長）

鯉の養殖で日本一の組合長として養殖漁業の育成に奮闘。全国養鯉振興協会役員もつとめる。

代々木正文（玉造町商工会青年部部長）

鯉こく缶詰「鯉ごころ」を販売するT・S・S（タマツクリ・サービス・システム）にも所属。県が主催する「ふるさと塾」の第一回に町代表として参加。

荒井一美（霞ヶ浦情報センター代表）

㈱A－1建築事務所代表取締役のかたわら、霞ヶ浦の再生をめざす民間の研究機関である霞ヶ浦情報センターの代表として、情報の収集、調査研究活動を活発に展開。

かけがえのない霞ヶ浦の存在に光をあて、ともに考える場に

常陽新聞社が創刊45周年記念事業の一環として企画している「霞ヶ浦ルネッサンス」シンポジウムが、本日「町づくり資源としての霞ヶ浦―玉造町の挑戦」をテーマに開催の運びに至ったことは、坂本常藏町長をはじめ町職員の方々、ロータリークラブなど町内の関係団体、パネラー各位のご理解・ご協力、さらに茨城県など後援団体・機関のご支援の賜であり、厚く御礼を申し上げます。

このシンポジウムは、1995年10月に第６回世界湖沼会議の霞ヶ浦開催が決定したことから、霞ヶ浦沿岸に本拠を置く新聞社として、県民意識の啓発のため機分なりともお役に立ちたいという念願から企画したもので、美浦村、潮来町、東村に次いで、玉造町が４回目の開催となります。

11年前に霞ヶ浦の富栄養化防止条例が施行されて以来、各種の浄化対策が実施されていますが、この間、玉造町の坂本町長は、沿岸・流域の市町村で構成する霞ヶ浦問題協議会の会長としてリーダーシップを発揮されてこられました。深く敬意を表する次第です。

玉造町はかつてワカサギ・シラウオ漁が盛んに行われ、白砂青松の浜辺が広がり、至るところに水浴場が開設されていました。近年、霞ヶ浦大橋の開通、「ふれあいランド」の開館などにより町の環境は大きく変化、漁業面では浄化のためコイ養殖縮小論も出るなど厳しい状況に直面しています。

一方、湖岸の植生観察会や流入河川の水質調査など住民の活動も活発化、ふるさと創生の一環として特産缶詰「鯉ごころ」が開発され、「ふれあいランド」を町づくりのために役立てる種々の検討も進んでいると聞いております。

「町づくり資源としての霞ヶ浦」をテーマにした今回のシンポジウムが、かけがえのない霞ヶ浦の存在に光りを当て、町の将来像を町民の皆さんがともに考える場として、引き続き定着するよう期待しています。

常陽新聞社代表取締役社長　岩　波　嶺　雄

特別参加

玉造町と霞ヶ浦

玉造中一年　大塲保昭

今、霞ヶ浦はさまざまな問題に直面しています。生活排水や工業排水などにより水質の汚染、アオコの異常発生、ごみの投げ捨てなど、このままでは霞ヶ浦は生活できない環境になってしまいます。

霞ヶ浦と僕たちの玉造は、さまざまな関係がありました。漁で生活していた人もたくさんいただろうし、網いけすの養殖などもさかんになりました。また、霞ヶ浦は海水浴客が訪れ、大人はもち論、子供たちも泳ぐことができたそうです。

以前から霞ヶ浦の付近に住んでいた人々は、みんな「昔の霞ヶ浦の水はきれいだった。もち論泳げたんだよ」と口をそろえて言います。しかし、僕たちにはこの霞ヶ浦からそれを想像することはとてもできません。でも、このままでいいのでしょうか。このままでは霞ヶ浦に未来はありません。

この汚れた霞ヶ浦を、もとのようなとてもきれいな湖にするためには、霞ヶ浦の付近に住んでいる人々みんなの協力が必要だと思います。それには、まず、それぞれが自分の身近かな問題から取り組んでいくことが必要になるでしょう。

例えば、日常の生活のなかから生まれる排油や洗たくや洗いものをした水などの生活排水を、霞ヶ浦にそのままれ流さないこと。また、釣りや散歩などを楽しんだ大人の人たちもごみを捨てたり、空き缶などを捨てたりしないこと。僕も環境について勉強する前は、あまり霞ヶ浦のことを深く考えずに過ごしてきました。でも、目の前にある霞ヶ浦の大切さを知るようになってから、考え方が変わってきました。

ただ、この湖の大切さについてできるだけ多くの人々に知ってもらうことも大切だと思います。一部の人だけがこんなに努力していても、きれいにならないからです。県や町を訪ね、いろいろな団体も以前から霞ヶ浦の水をきれいにする為の努力を続けています。

しかし、一度汚れてしまった水は元にもどすのにとても長い年月がかかります。あのように汚れきった霞ヶ浦を元にもどすのは簡単ではありません。私たち一人ひとりがこれからも水を汚さないよう努力を続けることが大切です。

幸い、私たちの町に霞ヶ浦ふれあいランドもでき、今の霞ヶ浦を見直すよい機会だと思います。水は人間はもち論動植物にとってなくてはならないものです。その大切な水が、こんなにたくさん僕たちの町にあるのです。この水を大切に守り続けていけば、将来、水と人間は今よりももっと仲良くなり、潤いのある生活ができるのではないでしょうか。

その夢を実現する為にも、これから霞ヶ浦の水をきれいにするよう、僕たちも精一杯努力していきたいと思います。

霞ヶ浦と水質浄化に思う

玉造中一年　武田美津恵

霞ヶ浦は日本で第二を誇る大きな湖です。私たちに豊かな暮らしをもたらしてくれる貴重な財産です。けれど今、この霞ヶ浦の豊かな自然は破壊されてきています。

昔の霞ヶ浦は水がきれいで、泳ぎに来る人もたくさんいたと聞きます。そして、飲み水や農業用水として使われ、まわりの人々にとってなくてはならない大切なものだったそうです。

ところが、今の霞ヶ浦はどうでしょう。臭いや汚れがひどく、とても泳ぐことはできません。なぜそんなに汚れてしまったのでしょうか。その大きな原因は、汚れのもととなるチッソやリンを川や霞ヶ浦に流した為だと言います。それが原因で、アオコなどが発生し、それが大きな問題となっています。今これ以上霞ヶ浦を汚していいんでしょうか。

霞ヶ浦をきれいにする為には、一番大切なことは汚れの原因となるチッソやリンを減らすことです。チッソやリンは、農家で使う肥料や家畜のフン、魚の養殖のエサ、家庭で使う洗剤などに含まれているそうです。そこまでわかっているのに、なぜきれいにならないのでしょうか。もしこのままチッソやリンを流し続けたら、霞ヶ浦にますますアオコが発生し、魚が大量に死ぬなどその結果は目に見えています。みんなが気をつけなくてはいけないことなのではないでしょうか。

茨城県では、昔の霞ヶ浦を取り戻そうとヘドロやアオコを取り除いたり、下水道を整備するなど、いろいろな努力をしているということです。私たちの家庭でも、もっと工夫すべきだと思います。

私たちの家庭でやることといえば、汚れの原因となるものを流さないようにすることです。私たちの日々のちょっとした工夫で、生活排水を長期にきれいにすることができるはずです。その工夫とは流しにアミやアミ缶をつけて残り物を流さないようにしたり、油は流さないで紙で吸い取ったりなど、たくさんあるはずです。また、リンを含む合成洗剤は使うことを止め、リンを含まない洗剤や石けんに変えるように心がけることも大切でしょう。

私たちにできることから直していかなければいけないと思います。霞ヶ浦に排水を流す工場なども、施設に費用がかかるかも知れませんが、どんなに費用がかかっても汚れた水を流すことはやめてほしいのです。養殖をしている人々も生活上大変だとは思いますが、まず環境を第一に考えてほしいのです。一度汚れてしまった湖は、なかなかきれいにはなりません。

これからも、私たち子どもそして大人の人たちも一人ひとりが川や湖を汚さないように努力し、何年かかってもきれいな霞ヶ浦を取り戻していかなければならないと思います。

霞ヶ浦水質浄化のキャラークター

はじめに○○○○○

コーディネーター　水上聡子

初めにまず申し上げたいのは、一般的にシンポジウムというのは壇上に偉い先生方がいらっしゃって、一通りそれぞれお話しをしてだいたい時間切れになってしまうというパターンが多いんですが、きょうはぜひ、皆さんと共に参加する対等な同じフロアにいるつもりでシンポジウムを進めたいと考えています。

もう一つは、東京から偉い先生を呼んでくるのではなく、一人ひとりのパネラーの方々が、それぞれ地域でいろいろな立場で活躍していらっしゃる、そういう手づくりのシンポジウムだということを、おさえておきたいと思います。

九十五年に世界湖沼会議が開催されますが、難しい学述会議にしてはならないと私は思います。極たんに言えば、一人ひとりが身近かな環境についての専門家であるべきだと言えるかも知れませんが、いずれにしても環境問題について、そこに住む人たちの主体的な意志によって動いていくべきだと思います。

ですから、世界湖沼会議には、霞ヶ浦流域に住むみんなが参加していくべきものだと思います。

さて、きょうは『町づくり資源としての霞ヶ浦』という題名ですが、町づくりということで考えていけば、いろんな資源がある。環境問題で活動している方もいれば、産業の立場からお話し下さる方もいます。それぞれの立場でトータルに、玉造町にとっての霞ヶ浦という形で進めていきたいと思います。

霞ヶ浦が日常の意志から遠ざかりつつあるとき、きょうのこの機会をステップにして再発見していこうじゃないか、そういう気持で始めたいと思います。

「玉造町と霞ヶ浦」

西谷　正明

役場での仕事は町づくりの計画、都市計画、開発の規制・誘導、さらに商業、観光、工業の振興など幅広い分野の仕事をさせて頂いております。

さて、今日私は「玉造町と霞ヶ浦」というテーマで玉造町が町づくりを進めて行くために霞ヶ浦とどう係わっているのか、また将来どうしようとしているのか等について観光の面から捉えて話をして参りたいと思います。

それでは、昔の人々はどう係わって来たのでしょうか、水運の盛んであった昭和の初期までは交通の拠点として商業、文化の面でも栄え、さらに、水泳場があったり遊覧船の往来した観光のメッカとしても脚光を浴び活気に満ちた時代が存在していたわけです。

それでは、ルネッサンス霞ヶ浦のタイトルの様に今後霞ヶ浦が町づくりに一役買ってくれるのでしょうか。

第三次玉造町振興計画のキャッチフレーズは『人にやさしい、いきいき自然派都市玉造』となっています。計画策定のとき、町の個性、玉造らしさを追求して来ましたが、やはり霞ヶ浦を生かした町づくりをどう進めるかが焦点でありました。

そしてその時、私たちは水の科学館がオープンし町の顔として広く知れ渡り若者達が海洋スポーツを楽しみ、多くの観光客が訪れ新しい観光施設が次々に誕生するような将来像を描いたのです。

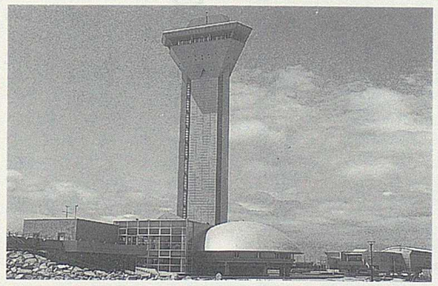
その水の科学館構想は昭和六十年の筑波科学博の閉幕のときに出て来た話ですが当時、町と県では高須にあります県内水面水産試験場の施設や技術を利用した水産公園構想を検討していた時でした。

町はこの二つの構想を実現させようと働きかけをして来ました。その結果、水の科学館を誘致することに成功いたしました。

その後、町は親水公園構想を打ち出し水の科学館と併設することによって観光施設として誘客能力を高め、これらを観光づくりの拠点に位置づけ一大観光レクリエーションゾーンを形成し、地域の活性化を図って行こうとしたのが町のねらいでした。要するに外から人々が訪れることによって地域の人達の生活や文化に刺激を与えると共に産業にも活力をもたらすのではないかと考えたのです。

水の科学館は霞ヶ浦総合開発事業を推進している水資源開発公団がその事業の目的と内容について理解を深めてもらうための施設として、また茨城県は筑波科学博に出展された水に関する展示物を後世に継承するため霞ヶ浦の地に残したいと考え、玉造町は町のシンボルゾーンの形成と観光施設の核づくりとして捉えており、この三者が一体となって完成させたわけです。

施設の内容は、テーマを「水と人間その生活」とし、水に関する展示コーナー、私たちと霞ヶ浦の係わりを映像にしたシアター、水の実験コーナー等、見て、ふれあいながら水に関する知識が知らず知らず身につく楽しい施設です。



一方親水公園は高さ六十mのタワー「虹の塔」をメインとして水と遊べる池や渓流を配した憩いの空間です。この二つの施設は一体として愛称「霞ヶ浦ふれあいランド」と呼び昨年四月オープン以来二十九万人の来観者が訪れています。たぶん、十月初旬には三十万人目の幸運なお客さんが現れるはずです。

このように霞ヶ浦を生かした町づくりの核は完成したのですが核だけでは投資効果は期待出来ません。現にふれあいランドに訪れる客は湖岸の提防を散策する等の人の姿はあまり目につかない状況で周辺整備をして行かなくてはならないと思います。

そこで、次のような事を検討して行きたいと考えております。

一つは、水産公園構想です。隣に広い敷地と、水と魚に関する技術の備わった内水面水産試験場があるのですから、ここと連携が取れるようになればもう一つの核が出現することになります。二つ目はこれも隣にある毎年ひまわりが咲く四haのお花畑の再整備です。水生植物園にするとか、この広い土地をうまく利用することによっては県下一の花の名所になれるのです。堤防敷に五年前ふるさと創生事業によって植栽された桜が大きくなるとさらに楽しみな存在となります。三つ目は、湖上の活用です。海洋性スポーツや遊覧船等で楽しめると客層がぐっと広がることになります。もちろん、ふれあいランド自身も展示の更新や話題性のある展示や遊具の導入、プールの設置等充実を図って行く必要があります。水公団・県・町の三者共同でつくったものですから三者で相談してゆきたいと思います。

また、これらと並行して郷土料理や特産品などのソフト開発が進んで行くことが期待されます。

このように今後の課題は多く大変ですが、霞ヶ浦を利用した町づくりの努力をして行きたいと思います。

しかし、この素晴らしい恵みを活かして行くためには霞ヶ浦がもっとインパクトが強くなくてはなりません。何と行っても湖岸や水がきれいであることが求められます。

町では、水質浄化対策の一環として平成三年に榎本地区に集落排水事業が完完し、下水道整備事業も平成八年に旧玉造地区の中心部約五十haが完成予定で工事を進めており平成十五年までにはその周りの百五十haを完成させる計画をしております。

しかし、下水道が完備すればいいんだというものでもありませんし、町内全域、霞ヶ浦流域全域が完成するのは遠い将来となってしまいます。

やはり、私たち一人ひとりが霞ヶ浦をきれいにするしかありません。この共通認識をもつことが出来れば地域の人々にまとまりを生み、町づくりを推し進めて行ってくれるのではないでしょうか。

最後になりますが、今後、霞ヶ浦を活かした個性豊かな町づくりを皆さんと共に進められたらと願っております。

「水辺の調査活動から」

大崎　靖子

最近、ごみ問題、資源リサイクル、家庭排水問題が取り上げられ、議論されるだけでなく、実践されるようになってきています。環境への関心の高さを示すものであり、結構なことだと考えております。

私たちの活動の出発点はここにあった訳ですが、数ヵ月の活動の後に方向転換を致しまして、町内の水辺の観察会に主眼をおくことに致しました。と言いますのは、粉石けんの普及やごみ処理の軽減化は、私たちが心がけるだけでできますし、私たちみんなが心がけていることでした。調査の結果から、家庭排水よりも大きな問題があることが分かってきたからです。そうした活動を基本に、いくつか問題を提起したいと思います。

一つは、町内の自然特にヨシ帯の保全と復元です。皆さんよくご存知のように、かつては湖岸がヨシ帯、水草帯に被われていましたが、今は見る影もありません。コンクリートむき出しの湖岸です。

自然の湖岸は、湖水の浄化に役立っているとよく言われますが、それ以上に私たちの生活の中にあったものです。例えば、緑を通しての生活に安らぎを与えてくれるとか、釣りや魚とりの場であるとかでした。

生活が近代的に機械的になればなるほど、私たちはその大切さを感じています。浄化能力を有するものであればなおさらのことでしょう。観察会を始めた五年前までは、比較的大きなヨシ帯がありました。その後急激に減少し、最も大きな浜地先のヨシ帯でさえも、完全に無くなるのではないかと心配です。

このヨシ帯を中心に水生植物帯の保全と復元を町議会にお願いして建設省に要望致しました。建設省では、霞ヶ浦大橋の畔に人工リーフやヨシの植栽を行っているので観察しておりますが、今のところ砂浜ができたりヨシが繁茂するということは無いようです。

最近では、「自然に優しい工法を」と河川や湖沼で様々な試みがあるようですが、どれも自然との違いが余りに大きく、果してこうしたことで保全や復元ができるのか心配になります。私たちが望んでいるのは、人工リーフではない、今まさに消滅し去ろうとしている浜地先のヨシ帯なのです。このヨシ帯の急激な減少を見ていると再び湖岸の自然は取りもどせないように思います。

しゅんせつ、導水、さらに県西用水、霞ヶ浦用水事業と

小川北中生徒との合同調査

様々なことに取り組み努力なさっているようですが、いずれもお金のかかる事業です。それも大変結構なことですが湖岸一帯に生い茂った水生植物帯は湖との調和が図られ、無くてはならないものです。この調和が欠けたら、霞ヶ浦の再生は期待できない様な気がします。長い目での見直しが必要だと思います。

二つ目には河川の自然です。私たちの調査では、梶無川でチッソの量が昭和五十年代に入ってから急上昇しています。その原因の一つとしては、河川のコンクリート化等の自然の消失が湖岸同様考えられるのではないでしょうか。

ごく最近行った観察会でも河川の水源近くの林が伐採されています。こうした水源近くの森林は、湿地に近く浄化機能を備えているはずです。これらの森林保全を開発から守るための制度をつくることが必要ではないでしょうか。

これは玉造町だけの問題ではなく、霞ヶ浦流域全体に言えることで、開発が進みすぎて本当はどうしょうもない状態に来ているのではないかと感じています。ここでも開発の進みすぎた状態を解消するための長期的な見直しが必要ではないでしょうか。ぜひ県政の柱にして頂きたいと思います。

以上二つの提言を致しましたが、いずれも基本的、長期的な問題で、これまで取り上げられなかった問題のように思います。

今までの対策、人工リーフ、しゅんせつ、導水、下水道整備等は効果があるかも知れませんが、今考えるといずれも浄化効果よりは経済効果が本音の対策ではなかったかと考えざるを得ません。そうであれば、長い目でみた開発の見直しこそが最大の浄化対策ではないでしょうか。

湖岸の自然の現状と課題

野原　幸之助

○はじめに

自然に親しむ会は、ふるさとの実態を理解し、親しみ保全への活動を進めるため、昨日も湖岸の観察会を実施しました。会場後方に展示してある水生植物約20種は、淋しい湖岸の植生の中から会員が探し、採集してきた皆さんへのお土産です。

昔、霞ヶ浦は自然の湖であったが、30年位前から人工の湖となり、地域住民と湖との接点であったヨシ原（水生植物帯）は、ここ十数年で$\frac{1}{10}$（十分の一）以下に減り、近くにあっても私たちにとっては遠い湖になってしまいました。いよいよ、住民（ひと）と湖（みず）と緑（みどり）の環（わ）で全湖岸に水生植物帯（藻場（もば））を回復し、町づくりへの資源と致したく2～3の提案をします。

○提案の1　湖岸の水生植物帯の回復を次の3つの理由から是非とも推進していこう。

理由の1は、漁業面より考察して、

ヨシ原（藻場）が$\frac{1}{10}$以下に減少したため、多様だった湖岸の生態系が単純化してしまいました。50種に及ぶ沈水植物はほとんど姿を消して、藻場は全滅に近い現状で魚の産卵・生育の場もなくなりました。

さらに、水質浄化の働きのある水草帯の減少は、湖内のプランクトンや魚たちの生態系を大きく変化させ、漁業問題が深刻になって参りました。昨日NHKで北浦のヨシ原復元の放映がありました。また、〝魚の寄ってくる水草帯がほしい〟と漁師の声が新聞紙上にも時折掲載されているのを見ます。

理由の2は、観光・景観の面より見て、

山紫水明の湖とその周辺の豊かな緑は、湖岸に住む人誰もが抱く郷愁であります。「'93全国都市緑化フェア」に本会の代表が出演し、湖岸の水生植物を農舟に生けて展示したところ、入場者の感銘の深さに驚かされました。また、水生植物帯を前景に霞ヶ浦を中景とし、筑波・富士を望む景色は、天下に冠たるものです。この景観だけは輸入も輸出も出来ない町民の財産であります。

理由の3は、自然観察・体験学習等教育の面からです。湖岸の自然は、最高のすばらしい生きた博物館であるべきです。本来ならば水辺にあこがれる子ども達にとっては自然に親しみ遊びながら体験学習の出来る湖岸の生きた自然博物館を与えたいのです。水草帯を復元して豊かな生態系の自然を取り戻したいものです。建設省が環境緩勾護岸に人工リーフを施工し、消波・砂浜・植生帯の復元を推進されているが、水辺の子どもほど湖から離れる現今、植生帯を点から線へ更に面へと早急な対策を望んで止みません。

○提案の2、霞ヶ浦ふれあいランドを中核に観光開発を推進していこう。

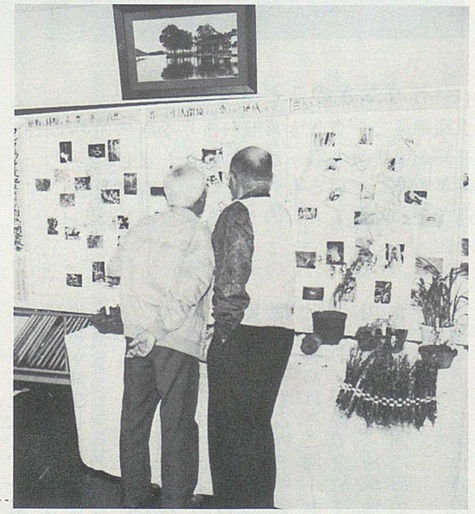
湖岸に埋もれた風景資源と文化財の開発・水陸両面の交通対策の検討により、一層の活用と湖岸の観光開発を図っていこう。水の科学館、人工リーフのある湖岸の水生植物帯、内水面水産試験場、梶無川、網生簀と帆曳船、高須の一ッ松・桃浦水泳場などの連携により、湖岸の活性化を図りたいと思います。さいわい本日来賓として水資源開発公団霞ヶ浦開発事業横田建設部長さんがご臨席しておりますので、過日（8月31日）常陽新聞紙上での談話の中に、水の科学館の件にふれて、「霞ヶ浦へのアプローチについても検討してみたいと思います。また、船で湖面より水の科学館へ来ていただけるように、湖から船の駅の設置を考えてみたいと思います」とありましたが、その点について横田部長さんよろしくご配慮方願います。（改めて念を押して申し上げました。）

○なお、次のような理由で「環境保全条例」の制定への意向を、関係当局に要望する気運を醸成したいと念願いたします。

鳥の目になって霞ヶ浦及びその周辺流域を眺めるとき、その回復と活用が急がれ、共存の道を歩み始めたい。そのために、乱開発による面源汚染対策がほしい。流域に於ける池沼、水田、川などの自然浄化機能の回復をはかりたい。そして環境保全のためにも早早な条例制定を要望しよう。

○最後に、霞ヶ浦の現状は、ダム湖の機能と浄化能力との両方の能力を持っているんだが、植生浄化の面が極めて淋しい。そして、住民は、水源地に住んでいるんだということを忘れないで霞ヶ浦と共存していこうではありませんか。

霞ヶ浦を町の活性化資源とし推進するためには、人と湖と緑と環になって暮らしていきましょう。



昨年の産業文化祭での「ふるさとの自然観察調査資料展示会」

霞ヶ浦の現状と課題

羽生　誠

私は、学者でも知識人でもなく浅学非才の一漁民ですので上手に話すことはできませんが、漁業については長い経験を持ち現在も現役であります。まず現状を話す前に、若い頃の霞ヶ浦の漁業の実態にふれてみたいと思います。

当時の霞ヶ浦は実に資源の豊庫でありまして、魚貝類もだいぶ棲息して水産業も盛んでした。なかでも漁業の代表的なものはワカサギ、白魚を獲る帆びき網漁業であります。帆びき漁は霞ヶ浦で考案された独特の漁法で、自然の風を相手の仕事で、風が吹いた日は夕方各基地より母船にひかれて漁場にむかい、一斉に帆を上げるとこの広い霞ヶ浦は白帆でうめつくされ実に美しい光景でした。

当時霞ヶ浦の帆びき船は五百三十そう操業し、漁獲水揚高の六～七割を占めていました。この漁業も、社会の進歩に伴って昭和四十二年を境に現在は動力で引くトロール漁業に変わりました。

また、えび・いさざ・はぜを獲る漁業も、当時は縄を巻き寄せ網を引き上げる重労働で、昭和五十三年には一万一千百三十トンの水揚げがありました。現在は能率のよいミッションを利用した動力となりましたが漁獲高は半減しました。

うなぎも原始的な漁法で竹筒を利用したうなぎせんや釣針を仕掛けて獲るうなぎはえなわ漁業で商売になり、一年中うなぎ縄専門で生活をしていた漁業者が大分いました。昭和五十二年に二百四十五トンあった水揚げが、六十年にはほとんど漁獲が無くなりました。

しじみ漁も昭和三十三年より採れだし、最盛期には年間三千五百トン水揚げされ、この辺でも一日三百キロも採れました。池蝶貝と共に、一時は霞ヶ浦の黒ダイヤと言われましたが、昭和六十年代に全滅しました。

これにはいろいろな要因があると思います。昭和三十八年に建設省の事業により、利根川からの逆流を防止して農作物を塩害から守るためとして常陸川の逆水門が建設され昭和五十年には完全に閉鎖されました。海と湖との交流が絶たれて以来、霞ヶ浦は完全に淡水化され、富栄養化が進み、水は悪くなり、うなぎ、しじみ、淡貝等が全滅したものと考えられます。

さて霞ヶ浦の現状ですが、皆さまご承知の通り、近年著しい産業の発展により企業優先の水資源の確保が主に進められているむきがあります。

うなぎのこどもを放流

玉造漁協で、さる9月24日にうなぎのこども約350キロを霞ヶ浦沖に放流しました。毎年実施しているもので、この日霞ヶ浦漁連で合わせて1トンのうなぎを放流しました。

昭和四十八年より二十年の歳月とばく大な費用を投じて建設省水公団が進めている総合開発により、霞ヶ浦に水量確保の為沿岸にコンクリートの護岸堤がつくられました。利水、治水の面は良くなり漁業基地の漁港舟だまりも完備され、昔とは見違えるように変わりました。おかげで水害等による不安から解消されました。

だが、開発はすべてが好都合にはいきません。護岸堤により岸が洗われ、ヨシ・マコモが無くなり、魚に最適な産卵場が消滅しました。さらに都市化が進み、家庭よりの雑排水も河川の改修によりストレートに流入し、企業公害等も重なり、漁場環境が悪化し漁類が減少したものと思います。

霞ヶ浦における漁業の概要ですが、現在霞ヶ浦には十八の漁業協同組合があります。上部に霞ヶ浦漁連があり、会員数は一千六百六十一名で兼業者が多く占めています。

漁獲高はここ四～五年五万六千トン前後で金額は十七億円。加工品は、地域性豊かな食品として全国に出荷されています。

漁業者も資源保護のために週休二日制の漁休日を設けて漁業秩序を守っています。わかさぎについては沿岸九漁協で湖内産による人工ふ化放流事業を昭和五十六年から実施し、毎年五～六億万粒の放流を行っています。その結果昭和五十五年に四十五トンまで落ち込んだものが、このところ五百トンぐらい漁獲されるようになってまいりました。

全滅したうなぎについても常陸利根川より稚苗を毎年一トン購入し、昭和六十年頃より放流を行いました。その成果が最近現われ、五～六トンの水揚げがされるようになってきました。

我々漁業者と致しましても、漁業生産量の増大はもち論漁業経営安定にも連なるものでもありますが、水質浄化にも大いに役立っているものと考えています。

富栄養化の原因物質のチッソ・リンはまずプランクトンに吸収され、そのプランクトン等を補食して魚は育っていきます。我々の行っている漁業は、魚を霞ヶ浦から取り上げる事によりチッソ・リンの負荷削減をはかり水質浄化に役立っています。

魚四十一トンで一トンのチッソが回収され、魚二百四トンで一トンのリンが回収されますので、年間にかなり回収する計算になります。さらに、我々の生活の場は我々が守ろうと連合会の指揮のもと、年三回延べ一千五百名と四百八十そうを動員し、町とも呼応して清掃大作戦を展開し水質浄化に取り組んでいます。

一時はアオコの湖になり魚もドロ臭く、漁民は失業して死の湖になるのではと心配しましたが、大分かい復して来ました。その証拠には、ここ二～三年大分白魚が獲れだしました。白魚は、多少塩分がありきれいな水でないと住めない魚ですから、条件が良くなったと考えます。

さて、課題である資源利用の町づくりですが、まず観光漁業の面で考えてみたいと思います。

昔より霞ヶ浦と言えば、筑波の眺めと水郷情緒、霞ヶ浦に浮ぶ帆びき船の風物詩であります。当町でも観光帆びき船の二そうもかべて撮影用の材料にすれば観光面で大いに役立つと思います。百年の歴史を持った霞ヶ浦独特の漁法をここで失うのは残念であります。現在六十歳ぐらいの方がこの技術を若い世代に受け継がないと、永久に悔を残すことになるのではないでしょうか。

二年後に世界湖沼会議が開かれるその時に見せたら、世界の人々から「ワンダフル！」の言葉がでると思う。ぜひ町おこし、地域文化の伝承の為にも実現してほしいと思います。

次に、霞ヶ浦の魚についてです。

霞ヶ浦漁師　野原　淳一郎

霞ヶ浦と養殖漁業

野原　淳一郎

私は、漁師の立場から霞ヶ浦と養殖漁業の係わり合いについて話してみたいと思います。

玉造町は、霞ヶ浦と延長十五㎞に及ぶ沿岸と接しているということで、町長の冒頭の話のなかにもあったように共存共栄し、恩恵も受けて来たわけです。きょうは私より先輩の方々がたくさんおられますが、私の小さい頃は夏になると毎日のように泳いで楽しんだわけでございます。

近くに広い砂浜があり、今のような堤防もありませんでしたからヨシもおい茂っていました。霞ヶ浦には舟の便があり、土浦へ行くにしても舟津から渡舟に乗り、出島村を経由して行った。午後にはその舟に乗って一日がかりで帰った、いま、霞ヶ浦大橋が開通して一時間もすれば土浦へ行けるのに、本当にのんびりした流ちょうな時代であったわけです。

そういう時代に、帆びきがなされ、それからトロール漁業へと進展がありました。

地元の消費が少ないという気がいたします。いまの子どもたちは骨組の発達が悪く、少し無理をするとよく骨折すると専門家は言います。小魚には多量のカルシウムが含まれているそうです。地域にこのように恵まれた資源があるのですから、学校給食に使用してもらうと、消費拡大にもなり一石二鳥、地域の振興に役立つと思います。

さらに、知恵を出し合いみんなで考えたら種々の町おこしができると思う。今後も、このようなシンポジウムを開き意見を出し合うことが、町の発展にもなる事でしょう。

霞ヶ浦資源の再活用と商工会青年部の取り組み

代々木　正　文

私たち玉造町商工会青年部は、外部団体玉造サービスシステム、略してT・S・Sを組織しまして、平成二年から養鯉缶詰「鯉ごころ」を出しております。

その一説からお話しします と、青年都OBと商工会事務局の方がそれ以前から、鯉を使った製品の試作を行っており、鯉こくの缶詰の商品化のメドが立ったときに、私たち青年部に要請され、それを受けて先に述べたT・S・Sを設立して現在販売業務を行っています。

では、なぜ鯉を使ったのかと申しますと。玉造町は西側全面を霞ヶ浦に接し、豊富な水資源を利用した鯉の養殖が盛んです。現在では日本一の生産高を誇っていますけれども、これらの鯉は玉造町内にだされることなく、生きたまま消費地へ送られたり、長野県などの第二次の養殖地へ送られています。

長野県の佐久地方や山形県といった鯉の産地はご存知かと思いますが、稚魚が霞ヶ浦から送られていることはあまり知られていないと思います。

私自身、最近まで思いもしなかったことです。例をあげてみますと、青年部で以前に研修に訪れた新潟県でも霞ヶ浦の鯉を使用しているとのことです。お話によれば、地元産の鯉を原料にすると水が冷たいせいで成長が遅れコストが高くつくんだそうです。

日本一を誇るものがあるんなら、それを活用して玉造町をアピールしようというのが鯉ごころの始まりでした。つまり、私たちの主目的はこの商品を通じて玉造町を商売の一つにアピールすることと、私たち青年部の活動を町内の人々に理解していただくこと、そして、町や若者の活性化につながる運動を続けることです。

先頃までは、鯉ごころの販売は注文による郵送販売が主でしたが、今後は各商店に陳列して町内の方々に身近かに接していただき、さらに玉造町を代表するお土産品としてピーアールしていきたいと思います。

ところで私たちの町玉造にはさまざまなものがあります。多くの古墳群、史蹟、霞ヶ浦大橋、昨年オープンしたふれあいランド。そして、何んと言っても霞ヶ浦だと思います。

霞ヶ浦は私たちにとって無くてはならない存在です。霞ヶ浦があったからこそこの地域に人々が居住し文化を形成してきました。時には災害があったでしょうが、多くの恩恵を受けて発展してきたのだと思います。

現在に至ってその重要さは増すばかりですが、周辺人口の増加による水資源の為の水ガメ化、流入河川による水質の悪化、画一的な護岸工事によって私たちが直接霞ヶ浦とふれ合う場所が無くなってしまいました。非常に残念なことです。

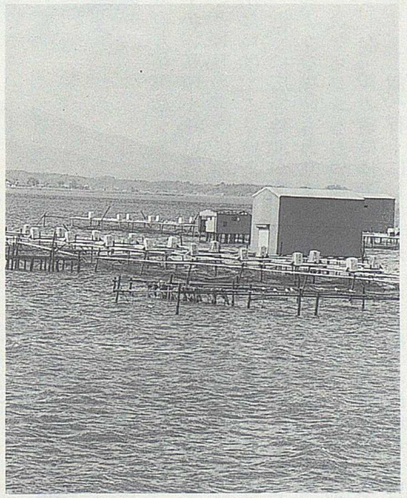
鯉こく缶詰

水質の悪化を押える為に鯉の養殖の縮小論があると聞きますが、地域の住民の犠牲を強いるようなこうした発言はつつしむべきだと思います。しかし、それほどまでに霞ヶ浦が危機的状況にあるということを改めて知らされたわけです。今後、私たちが霞ヶ浦に何をしてやれるかということを考えなければいけないと思います。

玉造町にとって霞ヶ浦は重要な資源です。大切な存在です。霞ヶ浦大橋の開通やふれあいランドの建設で来町者の増加がみられました。今後は水質の浄化を進め、霞ヶ浦と直接ふれあう場所を設けることで、利用者の増加を図ることが重要です。また、玉造町同様対岸の出島村にも観光施設が建てられているようで、各町村が連携して利用度を高める努力が必要でしょう。

さらに、地方独自の文化、例えば帆引き船の後継者の育成というようなことも大切だと思います。玉造町の特長は、水と土に恵まれた豊かな土地でこれらの活用度を高めていくことが、今後の発展につながるのではないでしょうか。

私たちも「鯉ごころ」だけでなく、第二・第三の特産品を開発し、玉造町の活性化の為に努力していきたいと思っています。



網いけす

これからの霞ヶ浦を考える

荒井一美

人間なんて大嫌いだ！これが多分今の霞ヶ浦の立場だと思います。自然にとって人間の存在そのものがどう考えても後になる。その後であるんですけれど人間は存在してしまっている。で、その存在そのものがどうつき合っていくかを考えるシンポジウムであると、私は理解しています。

『町づくり資源としての霞ヶ浦』ということで、玉造町の挑戦ということ、じゃ霞ヶ浦が何を挑戦しているのかということを、私の関係しているところだけご紹介申し上げたいと思います。

実は、霞ヶ浦情報センターという名前が入っていますが、一体何かという、そのことからご理解していただきたいと思います。

あと二年後に世界湖沼会議が土浦で開かれますが、その一回目が滋賀県の琵琶湖で開かれました。そのとき、私もたまたま参加していて発表の場があり、いろいろ調べたんですが、霞ヶ浦の情報を調べるのに苦労したんです。それぞれの研究者のものが公けの場で活用されていないということと、集約されていないと感じたわけで、それじゃそういった人間でやろうじゃないかとスタートさせたわけです。いま、玉造町の住民が土浦で活動しているということです。

まず私の場合は、資源とし

ての霞ヶ浦というなかで、先ほどから漁業については話がされていますが、農業については発表されていません。玉造の基幹産業として漁業、鯉の生産は日本一ですから、これは絶対に無くしちゃいけないと私は思います。そういう意味で漁業は大事であると思います。

で、科学技術庁の補助で今玉造町の浜地内で有機水耕栽培の実験が行われています。どういうものかと言いますと、水を使った無農薬・無肥料で野菜を作るんです。きょうは、こういう機会ですのでご紹介したいと思います。

まず方法としては、U字型の水路に水を流して水の養分を植物に吸わせて水をきれいにするということで方法は簡単なんです。水を吸み上げて水路に流して、その水路に植物を植えて育つということで、その結果として水がきれいになる。

水耕栽培は転作と休耕田を利用できますから、農業生産を上げかつそれが町の特産になっていけば、まさに霞ヶ浦の水は宝の水ということになります。必ずしも水が汚いからダメだということではなく、農作物を育てる意味から言えば、非常に栄養価が高く、特別野菜に肥料を与えなくても良いということです。

霞ヶ浦の水がどのような利用価値ができるのかということで一つの例をあげましたが、逆の面から考えていきたいと思います。

まず最初に、町の資源の一つとして水の科学館、霞ヶ浦ふれあいランドを行政だけにおまかせするのではなく、町民総意で活用方法をいろいろな意味で考えていかなくてはいけないなということが一つ。

どうしても今の施設が内むきのもので気軽に行って気軽に帰ってくるというものではない。まず一つの町づくりの基本としては、いまの施設がスタートだということで、じゃこれからどうするか。例えば教育の面からいろいろ話し合って、あの施設を活用していく必要があろうと思います。

現在の段階では親水公園と言いましても、水に親しむという部分が非常に少ないんじゃないかという気がします。いろいろな方に意見を聞きましてもそういう返事が返ってきます。その点を大きなポイントとして考えたいと思います。

次に今町で工事をしている公共下水道の意味するものを考えたいと思います。日本人の文化のなかに「クサイものにはふたをしろ」「イヤなことは水に流せ」というものがあります。まさに、公共下水道はその水に流すという、いい部分ではなく悪い部分の結果としての施設であると非常に問題が残ると思います。

公共下水道は、水質浄化の点からは非常に有効的ですが、汚れたものを処理する以前に、汚れたものを流さないという方がもっと大事だろうと思います。そういうことから公共下水道の意味を考えたいと思います。

ふれあいランドの近くに終末処理場ができるそうですが、どういう形でできてくるのか、どういう係わりができてくるのかというのも一つのテーマとして取りあげていただいて、今後の行政が推進していく上で参考になるよう、参加いただいている皆さまの意見を出していただくと有意義なシンポジウムになるだろうと思います。

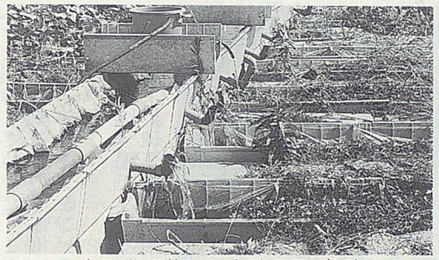
最後になりますが、霞ヶ浦情報センターの存在意義にふれていきますが、情報センターは、情報を収集してまとめておくということがあります。行政レベルでできないんなら民間レベルでやろうと、それが一つの大きな柱になっています。

商工会の飯田さんがこんなことを言ってました。飯田さんはもともと玉造の人間じゃなかった。「霞ヶ浦がなかったら、いまこの町にはいなかっただろう…」と言ってました。それだけ、その人にとって霞ヶ浦の存在は大きい意義があろうと思うんです。

その霞ヶ浦が、いまの段階だったら許せるが、もっと汚れがひどくなれば、多分でていってしまうんじゃないかと思います。絶対に、そういうことで霞ヶ浦がますます悪い状態になって、人が玉造町を出て行くということになってほしくないと思います。

町づくりの資源としての最大の仕事は人だと言います。資源はまさに人であり、人の活用が今後玉造町がより良く生まれかわるきっかけになると思います。

世界湖沼会議の成功例として、玉造町で発奮剤を設けることができれば今回のシンポジウムは大成功であったし成功させなくてはならないと思います。

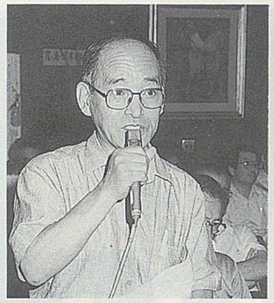

有機水耕栽培の実験様子（浜）

第六回世界湖沼会議

淡水資源の活用のあり方や富栄養化など湖沼をとりまく環境問題を、世界の国々の研究者や住民と情報と経験の交流を図りよりよい環境の創造のための対応の道を探ります。

▼会期　一九九五年十月二十三日～二十七日（五日間）
▼会場　筑波大学会館・土浦市民会館など
▼メインテーマ「人と湖沼の調和」

参加者からの発言



霞ヶ浦ふれあいランドについて

周辺の整備を全体像としてとらえることが大切

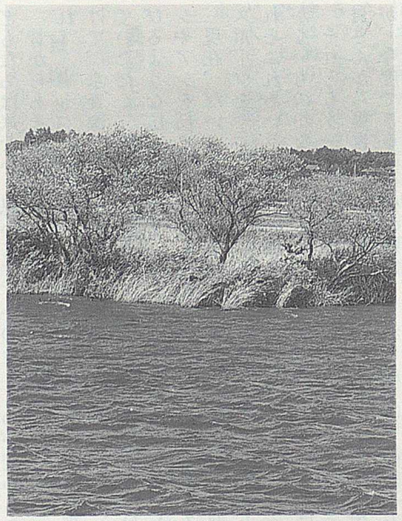
橋詰さん

私がつねづね考えておりますのは、玉造町にとりまして霞ヶ浦ふれあいランドそのものが約四十八億円という工事費がかかり建設されたということで、ここは霞ヶ浦大橋が開通したことにより東京方面からの玄関口になったと、こう思っているわけです。ですから、玄関口に対しまして町全体としてふれあいランド周辺の整備をどう全体像のなかからとらえていくか、これが一番将来にむけて大切なことじゃないだろうかと思っています。

いろんな整備を各地に分散してやるのも一つの方法だと思いますが、町の顔をつくる意味では、そういった施設を一ヵ所に集積してやることにより、駐車場の相互乗り入れの問題とか、いろんな関係で資本の相乗効果がでてくるので、私は一ヵ所に全部集中した方がいいんじゃないかと思います。

とりわけ産業文化のシンボル的な場所として、霞ヶ浦ふれあいランドを位置づけていってはどうかと。また、スポーツなどでも、例えばB&Gあたりでスポーツをやっていますが、県なり郡なりの体育の試合がいろいろあるようですが、山の中にある関係上、関係者しか見られない。

やはり、通りすがりの人なども見られるようなところでやっていれば、町民の方々も見に行くと思うんですね。そういうスポーツ、文化、産業などのもろもろの情報も充実していってもらいたいと思います。


霞ヶ浦に残っている水生植物帯（浜）

業者への実験スペースをつくってみては

中里さん

ことしの春に、科学技術庁の予算でいろいろな実験をやっているグループで、水の科学館付近まで来たことがありましたが、もう少し水の浄化関係のものでもあればぜひ見学したかったんですが、入りませんでした。

あそこは、水の浄化関係をやっている業者などが、ピーアールの場と浄化の比較をするにはいい場所です。

霞ヶ浦ふれあいランドの横に排水がありますが、その水を吸み上げて浄化するような実験スペースを作って、いろいろな業者に実験をさせるというようなことができるんじゃないか…と、つねづねあそこを通るたびに思います。

民間活力の本当にうまい使い方というものを考えられるんじゃないかと思います。

高須へ、沖へのびる州をつくってほしい

成島さん

一つご提言申し上げたいと思います。霞ヶ浦ふれあいランドは、霞ヶ浦とふれあうという目的で建てられたんだと思いますが、現在ただ霞ヶ浦の湖岸にあるというだけで霞ヶ浦とのふれあいがなされていないという感じがします。

で、西谷係長からお話がありましたが、周りのひまわり畑の利用で、春はれんげ草、夏はひまわり、秋は萩とかききょう、そういった畑にするといい。科学館はよく学びですから、学ぶことだけでは子どもたちは来ないと思います。

昔からあそこは高須と言われて、ずーっと州があったわけで、水資源の方で州を作っていただく。ずーっと沖へのびるような広い州を作り、ヨシやアシを植えていただく。

現在、だいぶ若者が水上のスポーツをやっているが、あれとふれあいランドとの接点がないものかなと思います。

それともう一つは、橋詰議員さんから提言がありましたが、今度できる浄化槽の終末処理場の上を何か利用してそこに、玉造町の文化の中心、資料館なり文化センターなり作って、本当の文化の中心にしたらどうか。お金が相当かかるでしょうけれども、そう思います。

漁業・農業の産業をどうするか

漁業のあり方によっても水質はどんどん変わる

春日さん

漁業は大事なものなんですが、もっと大事なのは生きものをコントロールできるということ。透明度が、だんだん悪くなったり、良くなったりしてますが、それは一体何かと言えば、その理由は湖のなかの生きものが変わることによっておこるんです。

透明度が悪くなった理由は漁業が悪いんだという一つの見方もありますが、実は漁業のやり方により、もっともっと良くすることもできる。漁業のあり方によっては湖の水質はどんどん変えることができる。

帆引きからトロールに変わった時に水質が悪くなった。最近漁獲量が五千トンぐらいしかとれない。前は一万二千トンぐらいとれたんですが、こう少なくなったのは、ブラックバスなんかが入ってきてなかの生きものが変わったときに落ちてきたと言えます。で、なかの生きものを管理できるのは漁業者しかいない。それくらい漁業者は重要な役割を負っている。ですから漁業者を守ることを第一に考えて下さい。

それから、大崎さんなどが湖岸が大事だということがわかってきたということは、今までそんなことを言った人はあまりいません。自分たちで調べてそれが分かった。それが大事なんです。

昔のようにするには、いまの護岸の内に藻場をつくろうじゃないかということ。少しぐらい湖の面積が減ってもいいから、昔のようなすばらしい砂浜があってヨシが生える湖岸にしょうじゃないかということです。ヨシは雑草で、一本水の中にほうりこんでおくだけでどんどん増えていく。

でも、この雑草が今は霞ヶ浦に生えなくて困っている。

水生植物帯の調査活動と経過を

橋詰さん

玉造町くらしの会の大崎さんにお尋ねします。産業文化祭で、水辺からの報告というものを発表して私も興味をもって見ていますが、霞ヶ浦湖岸の水生植物帯がどの程度残っているか、その経過や調査活動をお聞きしたいんですが。

残っている藻場は昔の10％弱

大崎さん

毎年産業文化祭に発表させていただいておりますが、私たちの子どもの頃から比較すると現在残っているのは一〇％弱です。藻場らしきものは浜のところにあり、この植物帯をずっと観察し写真で記録しています。

もう一つ活動として、今年は小川北中文芸部の生徒さんたちと梶無川の観察を行いました。霞ヶ浦の水質を考えるには流入河川が大切だと思います。流入河川の水質がどういう風になっているのか観察したんですが、そこで、今後上流の方での開発はよく考えて開発していただきたいと思います。

参加者のなかから提言などの発言をされた皆さんのスナップ

冬の間、ニジマスを放流してみては…

春日さん

漁業で一つ提案なんですが実は夏には魚がたくさんいるんだけれど冬にはほとんどいません。霞ヶ浦には。そこで、冬の魚を本当は開発しないと霞ヶ浦の水はきれいになりません。考え方として、冬にニジマスを大量に放流してみること。おもしろい考え方だと思いますが…。ニジマスを網イケスの内でエサをやらずに飼ってみたんですが、これが育つんです。ただし、そんなにたくさん率を上げることはできませんが。でもブラックバスのように増えることもありません。

高水温に弱いのでは

羽生さん

ニジマスは水温が上がれば死んでしまうんじゃないんですか。

それほど影響はでません

春日さん

死んでしまいます。死んでしまいますが、五月六月になれば漁獲量が高くなりますから、ブラックバスのように生きのこることがないので危険性はありません。たとえ死んでしまったとしても、それほど大きな影響は考えられません。

要望した、その回答は

貝塚さん

くらしの会の発表のなかで建設省に水性植物帯の保護を要望したということですが、何も再元していない。県や国の方では重要視していないのでしょうか。

後で回答を

西谷さん

いまのご質問ですが、町の段階ではわからないんですね。国とか県とかに要望されているということですけれども、きょうは国県の方がおりませんので、後に回答するということでご了承いただきたいと思います。

町づくりの基本は住みやすいと感じること

飯田さん

町づくりという観点からご提言させていただきます。町づくりの基本とは何んだというと、そこに住んでいる住民の方たちが住みやすいと感じるような町をつくること、それが一言で言えば町づくりじゃないかと考えます。

町づくりを進めるにあたってどういう方法で進めるべきなのかというと、私は都市をデザインすることだろうと考えます。都市計画という考え方を土台にして町をデザインしていくことが、町づくりじゃないのか…。と言いますのは、その切り口ですね。切り口は住みやすさであり、暮らしやすさ、それが切り口となって進めるべきなんじゃないのかと考えます。

そうした観点からみたときに、霞ヶ浦というのもその大きな町づくり資源なんじゃないのかと考えます。

まず町づくりはだれがやるんだといえば、そこに住んでいる住民であり、企業であり行政だと思う。これが一体とならなければ町づくりはできないと思うんです。町づくりの主体は住民なんです。企業を含めた住民なんです。行政の役割はどちらかというと、その調整役。全体を町づくりという一つの観点でとらえたときに、一人ひとりが勝手に主張していたんでは町づくりはできない。ですから、その調整役が行政の役目として年々大事になってきていると思います。

きょう壇上にいるパネラーの皆さんはそれぞれの代表で

町のなかにおいても、そういう検討すべき組織をつくっていただければありがたいと思うのが第一点。

町づくりは住みやすいと感じることで、いまふれあいランドの話がでておりますが、あそこは町づくりの顔にはなりえないと思います。ふれあいランドがあるから住みやすいかと言えば、特別そうは思わないんですね。ですから、あそこを核として周辺整備を進めるべきじゃないかという気がします。

行政の面から見れば、水辺の活用ですね。ウォーターフロント開発計画的なそういう風な構想のなかで、一体となって開発していかなければと思います。そのなかで提言をどんどんしていただきたい。

玉造町が今回のシンポジウムを機会に、情報を提供したり、いろいろな提言をしていく発進源となっていかなければならないと思います。

水まるくん

まとめ

町でも世界湖沼会議をターゲットにした企画を

菅沢さん

世界湖沼会議の関連で、玉造の町づくりのことを提言してみたいと思います。第六回の会議が茨城の霞ヶ浦で行われますが、世界六十ヵ国から三千人の方が参加します。それらの多くの方がこの霞ヶ浦大橋を通って、この玉造町にやってくると思うんですね。

その時に水の科学館を見たり、鯉の養殖場をみたり、内水面水産試験場を見学したり桃浦や浜からすばらしい高浜入の景観を楽しんでくれることもあるだろうと思います。その時に、玉造町としても世界湖沼会議をターゲットにした企画なり町づくりの為の仕掛けが必要なんじゃないのか。

例えば、先ほど羽生さんや代々木さんが言われた帆引き船の復活ということを考えてもいいでしょうし、鯉ごころに続くような特産品の開発ということも必要でしょうし、あるいは世界からおいでになった皆さんに玉造町を紹介するような企画なども必要なんじゃないのかなと思います。

で、その時にこの霞ヶ浦を知らないと霞ヶ浦の紹介はできませんよ。霞ヶ浦のことを話して下さいと言われた時、説明できる人は以外に少ないと思います。そういう時、霞ヶ浦情報センターなどの施設を利用して霞ヶ浦を勉強していただいて、将来の町づくりへ結びつけていただきたいと思いますね。

町民が町づくりに参画できる展開に期待したい

コーディネーター　水上聡子

玉造町は中くらいの町であると、事務局の方々がおっしゃっていました。なんと言っても現状維持に落ち着いてしまって、ついついのんびりしてしまう…と。そこで私が一番思いましたのは、発想の転換で、地域の資源をどうやって豊かに使っていけるかが、一番玉造町にふさわしい町づくりなんじゃないのかと思いました。

その為には、町民の方々がこれからいろんな町づくりに参画していくという姿勢、先程飯田さんからもお話しがありましたが、それがいかに大切かということをつくづく思います。そういうものを展開できるような、それは恐らく行政側の責任が一番大きいだろうと思いますが、そういう受け皿を作っていってほしいと思います。

小さな、ささやかなシンポジウムでしたけれども、これだけいろんな意見がでたというのはとても喜こばしいことで私も感激いたしました。

ぜひこれをきっかけに、第二段、第三段とどんどんやっていただきたいし、特にテーマは今回いろいろありましたが、個別にもっと深くほりさげていってほしいと思います。

最後に申し上げたいことは「ふるさと」という歌がありますけれども、そのうたをうたうときに私はいつも福井の故郷を思い出すんですが、ぜひ、玉造町にいま住んでいる子どもたちが将来、「ふるさと」をうたうとしたら、そのイメージのなかに霞ヶ浦というのが全面に押し出されるような、そうした子どもたちになっていけたらと思いました。

アトラクションでうたう
海老原　順さん

大洗港→室蘭港

親子ふれあいの船に参加して

磯部浩一

僕は，この研修を楽しみにしていました。理由は，いつも家族４人で出かけ，行くところは近くの県だけだったからです。

この研修で僕が一番楽しみにしていたのは親子木彫教室です。

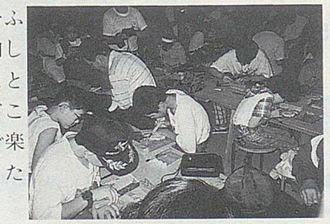
まず，始めに形だけできている熊にえん筆で彫るところを下書しました。僕がうまく書けなかったり彫り方が難かしかったりして，困っているところをお父さんが，手助してくれました。僕は，なんだかそのときうれしくてしかたがなかったです。

僕は，いままでは博物館の見学はあまり興味がなかったけど，北海道の博物館はなんだかしらないけれど，興味がわいてきて一生懸命に見てしまいました。その中でも，おどろいたのは，模型で作ってある小さな人形です。例えば，アイヌ民族博物館では，アイヌの人々の暮らしが小さな模型で作られていてすごく細かいところまできちんと作られていたのです。僕は，他の博物館のも夢中になって見ていました。

あと他におどろいたのは，火山科学館での有珠山が大爆発をおこしたときの車が展示されていて，その車は，火山灰が降ってきたり石が飛んできたりして，ぼこぼこになっていました。火山でおそろしいなあと思いました。

洞爺湖パークホテルサンパレスでの花火はすごく迫力があって，見たことのない花火もありました。すごくきれいでした。

船では，やっぱりリクリエーションが一番楽しかったです。高校生の人が中心にいろいろな遊びをおしえてくれました。始めは，一人でやっていたけど，歌や踊りとジャンケンのくりかえしをしているうちに，一人二人と友達がたくさんできました。



僕は，この親子ふれあいの船に参加してとてもよかったと思います。またどこかに，親子二人で楽しいところに行きたいです。

玉造町人材育成事業

茨城県中堅青年海外派遣事業（青年のつばさ）に参加して

野口孝幸

果てしなく広がる緑の大地，そして牛や羊の群れ，青年のつばさでのマレーシア・オーストラリア・ニュージーランドを訪れた，12日間の研修の旅は，まさに驚きと感動の連続であった。

マレーシアでの青少年スポーツ省訪問や海外青年協力隊視察。オーストラリアでのナーシングホーム（看護を必要とする老人のための施設）・身体障害者施設・環境局への訪問。豪日協会の方々との交流会。ニュージーランドでのファームスティなど，単なる海外旅行の観光地めぐりとは違い，異国の人とふれあうことができたことは，自分にとって生涯忘れることの出来ない貴重な体験となった。

三か国を訪れ，それぞれの国の事情を少なからず垣間見ることが出来，単に比較して日本の方が豊かであるとか，良いとか悪いとかではなく，そういう状況を作り出している各国の現状を知り，自分たちの身の回りでの国際化とは，どういうものなのかを考えさせられた。そして，もっと自分たちの回りを知り見つめなければならない。それが国際化への第一歩であるのだと感じさせられる12日間でもあった。

この12日間の研修で得た感動をいつまでも忘れず，貴重な体験を地域や職場で生かしていければと思う。

優勝は小座山（第二分団第五部）と宿（第二分団第三部）

――町の消防ポンプ操法大会――

玉造町消防団による「平成五年度消防ポンプ操法大会」が、十月三日に泉の総合運動場で行われ、小型ポンプの部で小座山チーム（第二分団第五部）、自動車ポンプの部で宿チーム（第二分団第三部）が、それぞれ優勝しました。小座山チームは二年連続優勝となります。

競技の結果は次のとおりです。（敬称略）

真剣な顔で操法を行う選手

▼小型ポンプの部入賞

優勝　小座山（第二分団第五部）

二位　新宿・横須賀（第二分団第四部）

三位　西谷（第一分団第三部）

四位　荒宿（第一分団第一部）

五位　泉（第三分団第七部）

六位　舟津（第二分団第二部）

▼自動車ポンプの部

優勝　宿（第二分団第三部）

二位　中山（第四分団第四部）

三位　根古屋（第一分団第二部）

▼個人賞（最優秀選手）

○小型ポンプの部

指揮者…高野宗一（第一分団第三部）

一番員…野原賢一（第二分団第五部）

二番員…柳瀬　薫（第一分団第三部）

三番員…磯山隆司（第二分団第二部）

○自動車ポンプの部

指揮者…星野正夫（第二分団第三部）

一番員…菅谷力（第四分団第四部）

二番員…根本長司（第一分団第二部）

三番員…千ヶ崎智（第五分団第三部）

四番員…鬼沢英明（第一分団第二部）

善意銀行へ

○9/10…榎本分校広場の会より八千三百五十五円

○9/22…水戸ヤクルト販売株式会社代表取締役赤木昭さんより一万五千円（福祉ヤクルト）

○栗原静香さんより十三万円（静雲書道展チャリティーから追加分

○4年10/16…なめがた農協玉造地区青年部より二万二千四百五十円

寄贈

玉造西小学校の通学路に外灯四基が、㈱井川食品と㈱A－1建築事務所により設置されました。設置工事は菅谷電気工事が奉仕して行われました。

盛大に詩吟大会開かれる

橋本孝先生の吟道55年と，本間流玉造詩歌吟詠クラブ発会35年を記念した「吟詠剣詩舞道大会」が，９月26日に玉造中央公民館大ホールで盛大に開かれました。

大会では，町内の各支部による合吟や高齢者による吟球などが披露され，記念大会にふさわしい詩吟大会となりました。

秋の全国火災予防運動

11/9～11/15

防火の輪
つなげて
広げて
なくす火事

文芸

短歌

平和へののろしか草を焼く煙　箱根七尾

り基地のジェット機低く飛ぶ　鈴木節子

野に　つたなくも吾がつくりたる音

頭を盆の踊りに使える嬉し　小沼正蔵

ふんわりと薄暮の中の蓮の花　奥田尚子

薄紅色も白もすがしき　久米妙子

初宮へ参るみどり児おそれつ　鈴木雄生

つ抱けば乳のにおいほのかに　島田敏子

参拝の秩父三峯霧けぶる夕暮　鈴木初代

れの中雲海を見る　小野口トク

わが髪の抜けゆく日日の憂き　小沼正蔵

思ひ粧ふ秋も深まりつあり　高塚麻子

乗り継ぎの電車を待てばイラン人親しげに来て荷物たのみし　奥田尚子

行き過ぎてフト立ち止まり振り返る誰が為に咲く宵待草ぞ　鈴木雄生

春追いし日々も在りたり今はただ脳裏をよぎる恍惚の影　大和田まさる

岩壁に投網打つ人夕焼けに影長々と川面にゆれる　箱根七尾

シャボン玉飛ばせし生家たづね来て雨情偲べばトンボ行き交ふ　八木みさほ

音もなく木の間に降るを受けし掌にのりし枯れ葉の意外に軽し　小野口トク

藪柑子の小さき花殻つままんとさし伸ぶる手にやぶ蚊まつはる　笹目久子

路せばめなかまどの花緋に燃ゆる身に沁むるなり北国の秋　郡司春枝

楢山に淡くかかりて残りたり片側欠けて光なき月　髙野整儀

俳句教室

陽が昇る揃ふ稲穂の道も良し　松本霜石

碑に野菊添えるも旅の情　八木草苑

秋灯や講座の課題難渋す　藤川秀子

また群れて飛ぶ夕暮の稲雀　永野一碩

いが栗の笑いぬままに切りにけり　鈴木夢情

虫の音や一夜の宿の旅疲れ　大和田秋海棠

萩の濃く辿れば詩碑や勿来関　飯島その

住み馴れて悲し病舎の法師蟬　長谷川鶏頭子

秋めくや障子に映る陽の陰り　茂木孝子

白き花ふれてこぼれる萩の道　飯島伸子

朝刊の見出しだけ読む農の秋　小島てる代

紫蘇の香の手をそのままに人迎う　武田淳子

湖も風ぎて筑波に霧のぼる　遠藤輝子

秋霖雨今日も一人のままで暮れ　小谷草洞

秋海棠ぽつりぽつりと雨がくる　鈴木和代

新涼や紅茶にくもる老眼鏡　藤本峰

芒野に杭打ちてあり分壌地　川島草人

俚謡教室

空は秋晴れ声援飛んで　町は幾代

総出の運動会　雨情

月も十六夜芒がゆれる　満喜

恋しと灯も招く　月

虫の奏でる音色の良さに　美代

も微笑む秋の宵　とく女

八十越しての精密検　医者の

笑顔に救われる　川原芒が十六夜月を

招く仕草の利根の風　竹堂

台風十三雷一つ　鳴って筑波

は茜色　茂伸

恋と云う字を忘れたはずが思い出させる秋夜長　花正

久し振りねと顔出す筑波　義一

写す湖面に秋の風　軒の風鈴風を呼んで　お風呂

上りに飲むビール　とくじ

やるせないよなあの夜の別れ　いなほ

やはりこのよな十三夜　手入れ不足の植木の下に　秋

を標すか草紅葉　茶水

利根に浮かんだ十五の月を　波がいたずらして逃げる　有美

遠い思い出十六夜哀し　夫と

別れた丘の駅　才依

冴える十六夜愛しいお人　映

えた二人の影法師　せい子

謡にたくして十六夜月夜　琴子

夢を平和に運ぶ筆　翠峰

何はともあれ終ってほっと　美代

四十二日の夏休み　月

秋の夜更けを鳴くこおろぎの　とく女

土間に一すじ月明り　よしお

もんぺ姿の十代でした　暗い

世相に夢も無く　藤娘

いくら待てども実らぬ稲穂　きよ女

捨ても出来ないいやな秋　老いの生活にゃ見栄など張らぬ　腰を据えそな秋炬燵　久子

今年しゃ夏なし梅雨から秋へ　夜は炬燵の温さ欲し　夢情

主婦を泣かせる防音工事　家具と荷物が十重二十重　和代

冷夏長雨悩まし頃は　せめて

豊漁初秋刀魚　しず女

二・六十二の一年過ぎて　めぐり逢えたよ秋の夜(に)　昭千

秋の取入れ気ばかりせわし　明日の天気が気にかかる　咲子

月も恥ずかし花野の秋は　虫

の音色で恋の街　房子

秋の祭りに芽生えた縁　梨の

つぶてか沙汰もない　草女

稲の作柄冷夏で悪い　秋の収

穫精がない　勇人

人の出た日を指折り数え　よ

しずたたんだ秋の浜　正人

毛貝の坪刈り手の鎌鈍る　豊

の秋には遠い秋　青芦

茨城県最低賃金が改正に

▽一　日……四千五百二十一円

▽一時間……五百六十七円

平成五年十月一日より実施

詳くは☎〇二九二（二四）六二一五へ

第九次漁業センサス調査にご協力ください

～11月1日～

農林水産省では、きたる十一月一日現在で第八次漁業センサスを実施します。

この調査は〝漁業に関する国勢調査〟ともいうべきもので、わが国の漁業の実態を明らかにし、今後の水産行政に役立てる重要な調査です。

このため、調査員が漁業関係者のお宅を訪ねていろいろお伺いしますが、調査した内容は法律によって守られており、外に漏れたり、税金対策などに使われることは一切ありません。

漁業関係者の皆さまのご理解とご協力をお願いいたします。

なお、指導員および調査員は次の皆さんです。（敬称略）

〈〉内は調査区域です。

▼指導員　田中久元

▼調査員

阿部隆男〈荒宿・藤井・西谷〉
黒髪保行〈西谷・西蓮寺〉
堀田秀男〈新田・竹の塙〉
飯田　廣〈竹の塙・新田〉
五十嵐康雄〈舟津・横須賀〉
関口弘美〈浜〉
小沼春雄〈八木蒔〉
幡谷吉治〈羽生・沖洲〉

県民生活地域調査にご協力ください

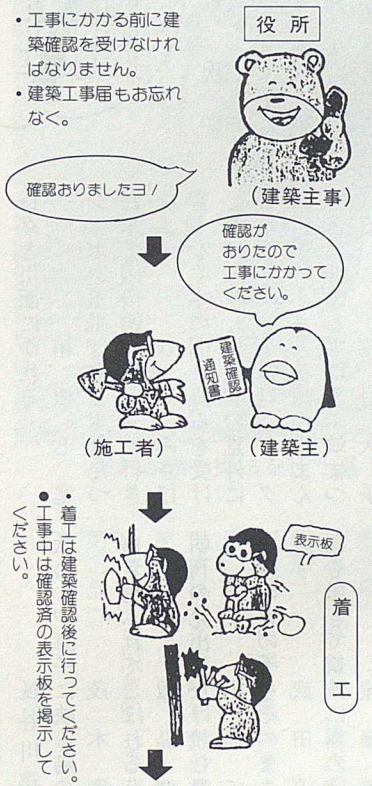
茨城県では、十一月一日現在で、『茨城県県民生活地域調査』を実施いたします。

この調査は、県民生活の現状とその地域差を明らかにし、各種行政を推進していくうえでの基礎資料となります。

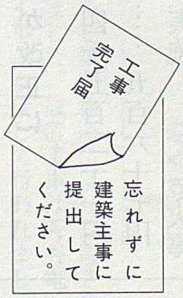
対象となった世帯には、知事が任命した調査員が調査票を持ってお宅に伺いますので、ご協力をお願いします。

なお、調査した事項は統計を作るためにだけ使うもので、その他の目的には一切使用しません。玉造町の調査員は五十嵐康雄さんです。

建築確認を受けた工事が完了したら工事完了届を提出してください



工事が完了したら、建築士は建築主に工事監理報告書を提出しなければなりません。



忘れずに建築主事に提出してください。

誕生おめでとうございます

出産（9月受け付け分）

ところ		赤ちゃん	続柄	保護者
宿	茂木	美香	二女	道彦
緑ヶ丘	大原	奈々	長女	菊弘
羽生	山崎	秀基	長男	健次
上宿	平野	郁美	二女	浩
新田	野原	美琴	長女	正幸
舟津	佐藤	樹音	長女	信也
緑ヶ丘	石橋	陵	二男	啓司
羽生	小澤	由佳	三女	吉輝
西蓮寺	田中	健太	長男	康男
竹の塙	飯田	大貴	二男	和久
浜	阿部	浩規	長男	幸一

おくやみを申し上げます

死亡（9月受け付け分）

ところ	氏名	年齢
新田	理崎清吉	七四
加茂	芳野勤	一九
西蓮寺	金塚宗一	九〇

※今月号から「出産」と「死亡」欄の掲載を再び始めます。掲載を望まない時には、届出の際にその旨住民係にお申し出になるか、または企画商工課広報統計係（☎五五―〇一一一）へご連絡下さるようお願いいたします。